

熟女店長



巨根がコンプレックスの
気弱なショタを食う熟女たち

うさぎロボ 著

一章 変態店長の置き土産。トイレに穴が。

そこで私は態度の悪い客に言い返した

「おうおう、おばちゃんだからって舐めとったらタ○キン蹴り上げるぞ!？」

言われて、相手の男はびくりとなり、文句を言いながらも立ち去っていきました

やっぱりそういうことをする男は相手がおとなしいと思ってやるだけで

文句を言われるとすぐひっこむらしいです

SNSに投稿する石川数子。

三〇少しの、ちょっとした美人。男に愛想よくされることが当然と思うような人生を送ってきた。

ただし、それは数年前まで。

これといったきっかけもなく、周りの男のなんというか優しさがガクリと減るのを感じた覚えがある。

少ししてから、その前後に「若い女」と「おばちゃん」の分かれ目があったのだと気づく。

コンビニの店員。

レジに立ちつつ、スマホをいじる。あまりいい態度とは言えない。

レジを男が叩く。

男。

パッと見ると女に見えなくもない、華奢な男だ。

だからこそというか、自分よりおとなしそうな相手にはつらく当たる感じがなんとなく伝わってくる。

「さっさしろよオバン!」

唾を飛ばすヒョロガリ華奢男。

眉を顰める数子。

——おらおら、誰がおばちゃんだ!？ どうやらタ○キンが惜しくないようねえ。タマタマ再生用のナノメカ入りの薬がそこに売ってるから、私の蹴りで玉が破裂したらお買い上げくださいよ!

「はい、ただいま」

啖呵を切るのは **SNS と脳内でだけ** という、気弱な熟女。

一様コンビニの店長だが、オーナーの店長が逮捕されたので唯一の店員だった彼女が臨時で店長を任されているという無茶苦茶な経歴。

——まさかあのオーナーが痴漢でパクられるとはねえ。しかも三回目という常習犯。私に何もなかったのが不思議なくらいね。

年のせいかも、とちょっと思わないでもない、店長はまだ二十歳そこそこだった。親の店がこの場所にあり、コンビニに建て替えて商売を始めた男。

当然というか、商売の資金も何も全部金持ちの親に出してもらった。

そんな楽に人生を送っている二〇歳からすれば、いくら美人でも三〇少しの女など目に入らないのかもしれない。

「ありがとうございましたー」

「けっ」

ゴミ箱を蹴とばして出ていくヒョロガリ男。

と、すれ違いに別の客が入る。ジャージに野球帽、サングラスというラッパー風の男。

「ん？」

近くで荒い態度を取られた。しかし自分へと思うほど近くもない。いぶかしむ程度のラッパー風男。

「あ、どうも」

それに対してへこ、と頭を下げるヒョロガリ男。背はラッパー風より高いが、体の厚みが違う。

下げて、さっさと店を出ていく。

嫌な態度の客が屁垂れるのを見て頬が緩む数子。

——おやおや、強そうな相手にはすぐ頭下げるんだ？ っていうほど強そうでもないけど。

ラッパーが何も持たずレジにやってくる。

「えー、高橋小学校の佐藤ですけど」

「え、うっそ、先生？」

「はい。……あの、前の店長さんが逮捕されたとか」

「いやあ……」

「明日からの実習の件なんですけど、どうでしょう。やれますかね？」

「あっ！ 聞いてます！ やれますよ」

社会体験というか、なんというか。

いろいろな仕事を体験するという触れ込みだが、あまり面倒なことはできないのでまあ店員的なことになる。

そういった校外学習を地元の商店などに頼んでいるわけだ。

よりによって、店長が痴漢でパクられるようなこのコンビニにも。

——っていうか、ああいうことがあった店なら断りそうなもんだけど。

「よかった、いまさら変更は難しいんで」

「ああ、なるほど」

「それじゃ、こちらには井上という男子がお伺いしますんで……よろしく願いいたします。おとなしい子だから、面倒はおかけしないと思います」

「はい、どうも」

——男子か……まあ女子だから問題なしとも限らないし、大人しい子ならまあ何とか……正直断りたいけど、ぜひやってほしいって店長がねえ……

小学生を受け入れて社会貢献して地元の学校界隈で信用を得て、ゆくゆくは受け入れ相手を中高生にレベルアップ、女子中高生に来てもらおうと狙っている。

痴漢で逮捕されておきながら、普通に店に戻って「信用を得て」行けるつもりなのだから舐めている。ずうずうしいというべきか。世界が自分に好意的なのを当然と考えるタイプというか。

——生意気なタイプのクソガキでないことを祈るしかないわ。本当におとなしい子なんじゃないかね？

思いつつも、聞けない気弱な数子。
聞いても仕方ないといえば仕方ない話である。

次の日、やってきたのは眼鏡の少年だった。
別の店に行くクラスの女子と一緒に来ていた。
女子たちは胸をはり、心なしか膝まで開き気味に見えた。
一方で、少年のほうは怯え切って見える。
——女の子のほうが強いクラスなのかな。それとも、この子がいじめられてるとか？
いかにも気弱そうで、ほっとする数子。

「今日からよろしくね、井上くんだったよね」

「井上龍彦です、よろしくお願ひします」

「それじゃ、とりあえず掃除からね」

別にとりあえずレジ打ちでもいいのだが、朝一番で客がいないので掃除となる。

このコンビニは、コンビニだが大体昼間しか開いていない。二人でどうにか二四時間開けていたが、店長が捕まっては仕方ない。

昔なら何としても二四時間営業しろと本店からいわれるところだが、最近いろいろうるさいので言われずに済んでいる。本来なら臨時店長の数子が誰か入れるべきだが、気弱な彼女はバイトとの人付き合いの面倒くささに後回しにしていた。

そんななんでも「気弱だから」でパスするものぐさな数子だが、子供から見ればしっかりした大人だ。「店長」という肩書もある。

が、そんなものより龍彦は別のモノを見ていた。

丸い丸い肉のビーチボール。

それも二個、胸元に抱え込んでいる。



——うわ、オッパイ大きい……

歩くたびに、ゆさゆさと揺れる数子の爆乳。

もともと巨乳だったが、加齢で全身に肉がついた流れの中でいつの間にか爆乳に成長していた。

しゃがむと、尻の肉が強調される、唾を飲む龍彦。

目線に気づく熟女。

——あらあ、あは、男の子ね。お尻とか、オッパイとか、ガン見じゃないの。ガン見って、ちょっとは遠慮しないと。

立ち上がり、肩を上げて爆乳を揺さぶってみせる。

「あうっ」

「ちょっと、何見てるのー龍彦くん」

「いや、その」

「うふふ、エッチはだめよー」

「ひっ！ す、すいません！」

バ、と股間を庇う龍彦。

一瞬呆気にとられ、ついで嘔き出す数子。

「いやいや、大丈夫よ。男の子の弱点にお仕置きしたりしないから。急所ボールを狙ったりしないから。っていうか、そういう人いるの？」

「く、クラスの女子がみんなそんな感じで」

「ぷっ、そ、そうなんだ。狙われるのね、その……キンキンボール」

顔を赤らめ、頷く龍彦。

——うほ、かわえええ。なにこの子。うわ、キンキンボールニギニギしたい、可愛いおチ○ぽくりくりしたい。

唾を飲む。

夫とはここ二年ほど夜の生活がない。

だからといっていきなりショタ狙いもない。

ちょっとした、いたずらがしたい、という程度の気持ち。

——どうしようかなあ。

やるかどうか、という悩みではない。

すでにやり方を考える段階だった。

やりかたを「どうしようか」という話。

事務室で仕入れ票を見つつ、ついでに考える。

事務室はちょうどトイレの裏側である。

——トイレなら当然おニンニンをポロリよねえ。何とかできないもんかしら。

とはいえ、戸を開けるわけにもいかないだろう。

と、ペンを床に落とす。

「おっと……」

机の下に入る。

光がさしていた。壁から。

「ん？」

思わず近づき、驚く。

穴だ。

壁に穴が開いていて、トイレが見える。

壁の穴にシールが貼られていて、それが剥げていた。

カッ、と頭に血が上る。

「ちょ……うっそやろ、あの変態野郎」

トイレや事務室の位置が多少変だな、とは思っていた。

しかし、こんな裏があるとは思ひもしない。トイレを覗きたいなどと考えたことは一度もない数子だ。

——いや、男の子のを握らせてもらったことはあったけど……小さかったわね。うふふ、アレが将来バナナぐらいに育つなんて不思議な感じね。まあ**育たない人もいる**っばいけど。旦那のはしっかり育ったもんで……っっていうかなんでレスになんのよ。妻とエッチしないと何か何それ？ 寝てることタマタマ握り潰したるか。

トイレは横から見る形だ。

——これだと座っていると肝心なものが見えない……いや、別に見たくねーけど。まあ正面は無理よね、扉だし。

正面に扉が来ない、ちょっと広いトイレにしたら便器を真正面から見る形にはできるだろう。

しかし洋式トイレに座った相手を真正面から見る場合、視線がぶつかることになる。穴に気づかれるリスクは高まるだろう。

それらの兼ね合いで、横からという形になっている。

それでも、座った股間が見えないという事もない。

ガチャリ、と戸が開く。

龍彦だ。

——やだ、だめよ。でも、動いたら音で気づかれるかも。誤解されちゃう。それじゃ動けなくてもやむなし、やむなしよね。うふふ、可愛いおニンニン……立ってするよね、男の子だもんね。さ、出して出して。

横から股間を凝視する。

机の下にしゃがみ、壁に顔を近づけるみっともない姿。

龍彦がブルンと、ゴムバットを垂らす。

印象より筋肉質な太ももの間にブランと垂れる巨棒。先も丸々としたのが剥き出しである。

年齢を無視しても並外れた巨根というしかない。

「ひっ」

思わず声が出る数子。

——ちょ、お、最近の子って成長早いのね……すごいわ。うちのアレより、すでにごっついもんぶら下げてる。うーん、すごい、雄だわ。すでに雄だわ。おキンキンも大きいし……でも毛は一本もなし。うふふ、かわいい。えぐいのにかわいい。

唾をのむ。顔を赤らめ、すでに雌の顔だ。



——女の喜びをしっかりと教え込まれていながら、年単位でご無沙汰という苦行の中、突如強烈な雄を見せつけられちゃったら……濡れるよねえ。もう、マジででっかい、おチ○ポデカイ。かわいい気弱なショタくんに、超絶デカイのぶら下げるとか反則よ。銃刀法違反よ！ お姉さんがお仕置きしちゃうぞ！

涎を垂らさんばかり。

しかしながら、基本気弱な数子である。

強引に口説いていくなどというのはなかなか難しいことだった。

実習は一週間。

といっても七日ではなく、週休二日なので五日だ。

何とかモノにできるだろうか。

——幸い、こっちのオッパイにあの子も興味ある感じだし……同じ年の女の子らにはビビってる感じで、年上の優しさがうれしいんじゃないかなあ？

穴にシールを張り、机の下から出る。

美人である。

自分から男を口説くなどあまり考えたこともない。

口説いてくる相手の中から、良さそうなものを選ぶという強者女子そのものの人生を送ってきた。

それだけに、自分から動くスキルなどない。

それでも、動くつもりだった。

——相手は気弱な子供だもんね、よくない展開になっても、なんとでも誤魔化して逃げられるわ。大人の男だと、変な感じにストーカー化したり暴力振るわれるかもしれないけど、ショタっ子なら安心して口説けるって寸法。

割と後ろ向きな考えだが、それでも前に進むならまあ前向きといえなくもないだろう。

体験版終わり

この後、学生時代の先輩（爆乳熟女）に初物をかっさらわれたり、時間切れで実習が終わったりしつつも、最終的には数子もしっかり思いを遂げます。

続きは製品版でお楽しみください。